

この教科書では、確かな歴史は学べません。
教員、保護者、区民のみんなで声をあげましょう！

今年の夏、教育委員会で教科書採択があります。5人の教育委員の判断だけではなく、教員、区民、保護者の意見を反映させた採択をするよう教育委員会に求めましょう。

▶ 教員の皆さんは…

ぜひとも教科書調査報告書に声をあげてください。

▶ 保護者・区民の皆さんは…

済美教育センター及び指定図書館で「教科書展示会」が開かれ、区民の意見を募る予定です。ぜひ、アンケートを書きに行きましょう。杉並区のホームページから「区民の声」として意見を述べることもできます。

◆区民アンケート期間 6月9日～7月2日

◆教科書見本展示会場 ・済美教育センター

・中央図書館

・西荻図書館

・高井戸図書館

・下井草図書館

※上記会場で教科書展示会は巡回となります。

※各会場ごとの展示期間、時間等は杉並区のホームページでご確認ください。

▶ 諸情報は

杉並の教育を考えるみんなの会

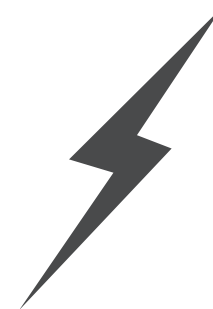
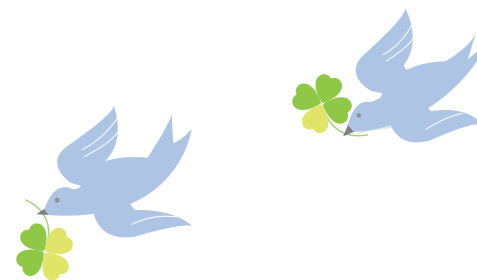
検索

ブログ版もあります

▶ ひらかれた歴史教科書の会編「『新しい歴史教科書』の〈正しい〉読み方」

(青木書店刊)もご参照ください。

発行:ひらかれた歴史教育の会/連絡先:hrkjimukyoku@yahoo.co.jp 2009年5月/30円



扶桑社版 中学歴史教科書

- ◆ 権力闘争で「つくる会」分裂！それでも使うの？
 - ◆ 間違いだらけの教科書。しかも4年間一度も修正ナシ！
 - ◆ かたよった歴史像を「国の物語」として押し付ける「教化」書
 - ◆ 教員の意見を無視して採択された教科書
- みんな困ってます☹

もめごとだらけの
教科書は

『つくる会』歴史教科書

もつやめて！

2005年の採択で、杉並区教育委員会は、市民や保護者、教員の反対を押し切り、扶桑社の歴史教科書を採択しました。この教科書を採択したのは全国583地区(当時)のなかで、栃木県大田原市と杉並区の2地区だけでした。私立校や、都立中高一貫校などを含んでも採択率は0.4%以下です。発行部数は毎年約5000冊、そのうち約2000冊が杉並区の中学1年生に配布されています。「つくる会」教科書の4割を杉並区が引き取っているわけです。

——今年の夏、中学校教科書の採択が行われます。

ただし、2011年に新しい学習指導要領にもとづく教科書採択が行われるため、杉並区教育委員会は「あと、2年だけだから同じ教科書でいい」という方針でいくことが予想されます。

——ホントに、それでいいの？

杉並区では毎年約2000人の子どもたちが、期待をふくらませて中学生になります。「あと2年」といっても、現在の小5、小6の子どもたちが3年間使う教科書です。

——問題点を、この冊子にまとめました。


1997. 1月 「つくる会」設立。西尾幹二初代会長
 2001. 4月 扶桑社版の中学校歴史・公民教科書が検定合格
 7~8月 扶桑社版教科書採択率 歴史0.039%・公民0.1%
 2002. 7月 西部邁氏・小林よしのり氏役員辞任
 (反米か親米かをめぐり対立。前年のあまりに低い採択率も影響か?)
 2004. 8月 八木秀次氏会長就任
 ...この間、事務局長解任等、内紛数知れず...
 2005. 4月 改訂された扶桑社版教科書(歴史・公民)が検定合格


2005年夏 扶桑社の教科書採択率 歴史0.39%、公民0.19%

低い採択率の責任をめぐって内紛・分裂! *注1

2006. 4月 八木会長辞任、
 「つくる会」脱退
 10月 八木氏
 「日本教育再生機構」結成
 2007. 2月 扶桑社が「つくる会」へ絶縁状
 7月 「教科書改善の会」設立
 8月 育鵬社設立(扶桑社の子会社)

2006. 4月 小林正会長就任
 2007. 5月 「つくる会」小林正会長解任、
 藤岡信勝会長就任
 7月 八木氏を名誉毀損で提訴
 9月 自由社から「新編新しい歴史教科書」を発行することを発表
 2008. 6月 扶桑社に対して著作権を主張し、
 出版差し止めを求めて提訴
 自由社から「新編新しい歴史教科書」を発行することを発表

 「つくる会」は、内紛によって分裂した。「つくる会」は内紛が絶えないから手を引く。

 八木会長や一部の理事が辞めたが...分裂した事実も、紛争が起こったこともありません。

扶桑社版 「新しい歴史教科書」
 八木派(教育再生機構—教科書改善の会の母体)
 扶桑社版の160ページ分は藤岡・西尾両氏が執筆。
 代表執筆者は藤岡信勝氏

自由社版
 「新編新しい歴史教科書」
 藤岡派(つくる会)
 代表執筆者は藤岡信勝氏
 2009.4月 教科書検定合格

*注2

同じ執筆者、内容もほぼ同じ!

保護者は?

- 歴史は事実から学ぶもの。あんな愛国心教科書では、国際社会の中での自国を客観的に見る力が育たない。あんな教科書で教育を受けていると思われる杉並の子ども達がかわいそう。恥ずかしい。
- 税金の無駄遣いね。現場の先生たちの意見が反映されているのか? あらためて疑問に思うわ!
- 子どもには、あの教科書は役に立たないし、読ませたくありません!
- あの教科書は、無駄が多く視点が片寄っていて受験の弊害になる。今のところ、先生が補ってくださっていると信じている。塾や通信教育で補えない家庭の子はどうなるのか?
- 歴史の教育は積み上げていくもの。教科書は、事実を客観的に表現すればいい。私達が受けてきた教科書のどこがだめなのか? 政治がちゃんとしていれば、愛国心は自然とついてくるもの。政治が愛国心を強要するときほど、おかしな方向へ向いていると、歴史が証明している。

学習塾の先生は...

中学生に英語と数学を教えています。生徒に、「理科と社会はどうやって勉強すればいいの?」と聞かれると、「授業をしっかりと聞いて教科書をよ〜く読んだら、教科書準拠の問題集で覚えたことをチェックすること。」と答えてきました。保護者からも問題集購入を依頼されますが、「2006年からは杉並区だけ市販の教科書準拠の問題集がない、全国採択率0.39%の扶桑社版教科書で子どもたちが勉強している。」と伝えました。

親御さんは困惑していましたが、本当に困っているのは子どもたちの方です。

使っている中学生も、こんなことを言っています

- 無駄にわかりやすく、幼稚。単純で何にも考えない子には入りやすいね。
- 日露戦争で勝ったことで「アジアの人々を勇気づけた」と書いてあったけど、そこまで表現する必要はないと思う。
- 日本をいい国すごい国と、誇張して書いてある。武士や日本の文化をすばらしいなど...例えば、忠臣蔵のエピソードなど熱烈に感情移入して書いてあって気持ち悪い。

現場の先生は、この教科書をどう思っているの？

扶桑社版歴史教科書が採択されて1年半後の2007年9月、杉並区立中学校保護者有志が、区立中学教員宛にダイレクトメールでアンケートを実施しました。

23校中12校の教員から回答がありました。その一部をご紹介します。

Q. 扶桑社版『新しい歴史教科書』を、教科書として使いにくいと思ったことはありますか？

A. ある……10
ない……1
まだ使ってない……1

Q. 現在使っている扶桑社版『新しい歴史教科書』を、他の教科書に取り替えてほしいですか？

A. 取り替えたい……10
現在の教科書がいい……0
その他……2 (未使用含む)

Q. この教科書を使用することで、子どもたちに何らかの影響や不利益があると思いますか？
あるとすればどのようなことですか？

A. 一面的な天皇中心の歴史観を強調しており、日本の伝統文化は天皇制であると押しつけている。日本の民衆の力やダイナミズムを学ぶことができない。

A. 歴史を科学として捉えず、道徳の教材のように扱おうとしている。資料をもとに生徒が想像したり、深く考えさせたりというよりも、「ねばならぬ」的印象が強い。

A. この教科書の記述は「歴史学」ではなく、「歴史物語」なので、歴史を構造的につかまえる視点や考える力が育ちにくいと思う。

A. 受験に使う大事な資料と内容です。歴史の流れの理解や語句も、重要な点で、大きく他の教科書や問題集と違います。

A. 国家主義の思想に染まってしまう、人権や自由、人間らしさや真に大切にしなければならないことを見失ってしまうかもしれない、という心配が大いにある。

A. 問題集をやらせていて困ったことがあった。

※アンケートの全文は、「杉並の教育を考えるみんなの会」ホームページに掲載されています。

<http://www.sugimina.com/>

*注1 なぜ、分裂したのでしょうか？

一番の理由は、2005年の教科書採択で極めて低い採択率だったためです。

扶桑社・八木派

「(これまでの扶桑社教科書では)各地の教育委員会の評価は低く、内容が右より過ぎて採択がとれない。」

「次回の教科書発行に当たっては、…国民各層からの支持をいただけるものにしなくてはなりません。」(07.2.26 扶桑社社長の回答書)

「扶桑社の教科書よりわかりやすく、こなれた記述に改め、幅広い支持が得られる教科書を出す。」(「教科書改善の会」発足時の記者会見)

「内容が右より過ぎ」「国民各層から支持」されない、“分かり難い”、“記述がこなれていない”と、扶桑社・八木派は認めているのです。そこで、扶桑社は子会社「育鵬社」を設立し、学習指導要領改訂にあわせた教科書を作ると発表しました。つまり、「つくる会」藤岡派とは手を切ったのです。

しかし、新学習指導要領実施までの2年間は「代表執筆者藤岡信勝」の扶桑社版教科書を、「継続発行する」としたのです。

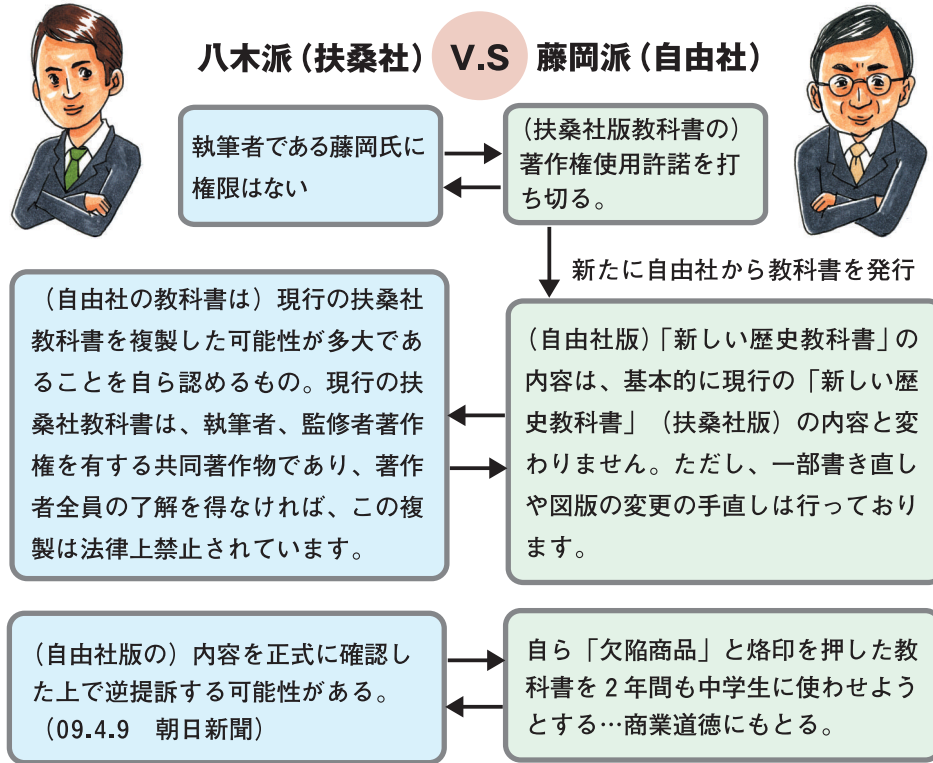
*注2 藤岡信勝「つくる会」会長は…自由社から教科書発行

「つくる会」は扶桑社から絶縁され、多くの執筆者は「再生機構」(八木・扶桑社派)に移りました。藤岡氏は、八木「再生機構」事務局長を名誉毀損で、扶桑社を著作権侵害で提訴するなど次々と裁判を起こしています。

2009年4月、自由社版「新編新しい歴史教科書」は文科省の検定を通り、藤岡信勝氏が、扶桑社版と自由社版と2冊の教科書の代表となったのです。藤岡派は、自ら次のように言っています。

「『代表執筆者藤岡信勝』の2種類の教科書が俎上に乗るという前代未聞の珍事態が現出」(09.4.9 検定合格にあたっての「つくる会 見解」)

著作権をめぐる裁判沙汰に…？



扶桑社版も自由社版も、「つくる会」会長の藤岡氏が代表執筆者であり、この教科書の発行と著作権をめぐり、ますます醜い泥仕合が激化しています。藤岡氏らは裁判に持ち込み、4月現在も法廷で係争中です。

●「新編」とか「書き換えた」とか言っても、目次の項目の35%はまったく、54%がほとんど同じで、約90%が扶桑社版と変わりません。

- (例) 《扶桑社版》 《自由社版》
- ・聖徳太子の新政 → ・聖徳太子の新しい政治
 - ・悪化する日米関係 → ・中国をめぐる日米関係の悪化

● こうした泥仕合は、教育や子どもたちとはまったく無関係なことです。しかし、杉並区では否が応でもこの泥仕合に巻き込まれます。例えば、藤岡派が「扶桑社は教科書を供給できなくなりました。」と情報をながし、扶桑社はこれに「中傷であり、業務妨害」と非難しあう中で、杉並区の中学校には、次のような文書が送られてきました。

国際社会に向けて、—— 平和への問いかけのない教科書

歴史教科書の最終項目は、21世紀に生きる私たちがどのような問題に目を向けていくのかを問い、中学3年の公民科につながるような構成がとられます。どんな内容がとりあげられるのか、他社版と比べてみましょう。

日本書籍新社／3ページ

激動する世界の中で

- ・冷戦の終結 — 東西ドイツの統一／ソ連の消滅／地域紛争と地域統合 — EUの成立／グローバル化／南北問題と経済格差／地球環境問題
- ・新しい時代へ — バブル経済とその崩壊／55年体制の崩壊／高齢化・少子化による社会保障の問題／「平和な国際社会」についての問いかけ
- ・最終コラム 戦後の日本社会と平和

帝国書院版／4ページ

1. 変化する世界と日本 冷戦の終わり / EUの成立 / グローバル化 / 南北問題と経済格差 / 戦後補償問題
 2. 今の自分にたちかえて 21世紀の取り組み— (世界) 核兵器廃絶 / 経済格差の問題 / 国際平和と環境維持 / 地球温暖化 / (日本) 部落差別 / アイスや在日コリアン差別 / 男女共同参画の実現 / 犯罪の低年齢化と家庭内の虐待 / 外国人労働者の問題 / 高齢化、少子化と福祉制度のあり方
- ・共生の時代へ— 非政府組織(NGO) / 地球規模の課題と国内の課題への問いかけ

扶桑社／3ページ

82. 共産主義崩壊後の世界と日本の役割 — ベルリンの壁の崩壊 / 米ソ冷戦の終結 / 昭和から平成へ(昭和天皇崩御) / 国際社会における日本の役割
- ・最終コラム 昭和天皇

他社版は、平和と国際社会のあり方から国内問題まで子どもたちに考えさせる材料を様々に提供しています。一方、扶桑社版は、世界の平和についての問いかけはなく、国内外の多様な問題に一切触れていないことが一目瞭然です。「国際社会における日本の役割」では、1990年の湾岸戦争を取り上げ、「日本は憲法を理由にして軍事行動には参加せず、巨額の財政援助によって大きな貢献をしたが、国際社会はそれを評価しなかった。」と、アメリカの評価を「国際社会」に言い換え、平和憲法があってはいけないかのような記述です。扶桑社版は内容に偏りがあるのが良くわかります。教科書展示会で、ぜひ読み比べてみてください。

日本国憲法を軽視—浮かび上がる改憲の意図

天皇主権で、立法・行政・司法から軍事指揮権にいたるまでの天皇大権を規定した大日本帝国憲法のもとで、日清戦争からアジア太平洋戦争までの戦争がおこされました。その反省の上に制定された日本国憲法は、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義(戦争放棄)という3原則を明確に定めました。

扶桑社版は、日本国憲法の説明の冒頭に

「世襲の天皇を日本国および日本国民統合の象徴と定めた。さらに国民主権をうたい…」

と述べています。象徴天皇を先に位置づけ、国民主権の意味を薄める表現です。そして、憲法の特徴を3原則としてあつかわず、その意義をあいまいにしています。また、

「GHQが示した憲法草案を…やむをえず受け入れた」

と記述しています。日本国憲法の制定はGHQの指示で進められたことは事実です。しかし、日本の民間研究団体の憲法案が参考にされ、第25条の「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という生存権の規定など、憲法案の国会審議の中で加えられた優れた規定もあります。日本人の主体的努力の上に実現したことを無視することは事実と反します。帝国書院版は、新しい時代に対する国民の期待が盛り込まれていたことにふれています。扶桑社版は戦争の惨禍を経て、多くの国民が日本国憲法を歓迎した事実を目をふさぎます。

◆「憲法改正」の意図?—扶桑社『新しい公民教科書』

歴史教科書と同じ考えの執筆者によって作成された扶桑社版公民教科書には、他社版にはない、2頁におよぶ「憲法改正」という項があります。ここでは「『世界最古』の日本国憲法」というコラムがもうけられ、日本より早く制定された13か国の憲法は改正などで手を加えているのに、「わが国の憲法は制定以来一字一句まったく変わっていないという意味で『世界最古の憲法』なのである」と、改正をしない日本国憲法を揶揄しています。中学生を「憲法改正」論に導こうという意図が浮かんできます。

各位

平成20年5月8日
教科書発行のご案内

現行版扶桑社教科書の平成22・23年度分は、引き続き扶桑社から継続発行します。
—新指導要領に対応した24年度からの教科書は、育鵬者から発行—

株式会社 扶桑社
代表取締役社長 片桐松樹

こんな泥仕合を繰り返す扶桑社教科書を、それでもまだ杉並区は使いつづけるのでしょうか？子どもや教育現場をもうこれ以上、巻き込まないでほしい！

大蔵杉並区教育委員長は、教科書採択に関与しているの？

特定の教科書に関わった者が採択から外れるのは、「つくる会」会員であった高橋史朗前埼玉県教育委員長が、採択に参加しなかった例を見るまでもなく、常識です。

主な発起人・参加者

教育界からの主な発起人と参加者は次の通り (50音順、敬称略)。

大蔵雄之助(東京都杉並区教育委員)▽大多和聡宏(開成中学校校長)▽小田村四郎(前拓殖大総長)▽小原芳明(玉川学園理事長)▽加藤十八(中京女子大名誉教授)▽川島信雄(東京都国立市立第二小学校長、東京都教育研究連盟常任理事)▽小林弘治(千葉県八千代市立大和田中教諭)▽小林

▽阿部孝(廣池学園常務理事)▽石井公一郎(元臨教審専門委員、元東京都教育委員)▽伊藤隆(東大名誉教授)▽岩田吾成(モラロジー研究所顧問)▽江部満(明治図書相談役)▽

大蔵雄之助教育委員長は、「教育再生機構」(八木派)の設立メンバーに名を連ねています。同会のホームページには「代表委員・設立発起人」として載っています。この「再生機構」は、その下に「教科書改善の会」を作り、育鵬社から新しい教科書を出すという団体です。大蔵氏自ら4年前の採択で扶桑社版を強く推しながら、扶桑社教科書を、欠陥があるから廃止して作り直そうという動きに関わるとは、無責任な話です。まして、その教科書を継続採択することはなおさらです。そもそも、採択に関与する人物が特定の教科書に関わること自体が公正さを欠きます。特定の教科書に関わった者は採択から外れるべきでしょう。

こんなに誤った記述

扶桑社教科書ページ	誤っているところ	コメント
口絵②③	阿修羅像一将軍万福作／四天王像広目天一國中連公麻呂作など	いずれも作者を断定する根拠はない
P.16上図解説	「現世人類の脳の容量は2000cc」	1500ccの誤り
P.25上図	吉野ヶ里遺跡図	絵が稚拙で、集落が盛り土の上であり、環壕が柵の内側にあるかのように見える。
P.33本文L12	帰化人	帰化人は中華思想に基づき日本を『小中華』とした造語で、ここで使うのは不適切
P.45 地図	北海道を「蝦夷」と表記	古代に北海道を「蝦夷」（えぞ）とするのは間違い
P.59 コラム 紫式部と女流文学	「紫式部や清少納言、和泉式部らは、ライバル…」	紫式部、清少納言は宮中に仕えた時期は違っており「ライバル」と言う表現は誤り
P.70 本文	「フビライは…服属するよう求めた。しかし、朝廷と鎌倉幕府は一致して、これをはねつけた。」	はねつけ、戦争の選択をしたのは執権北条氏によるもので「一致して」と言うのは誤り
P.87 地図	「おもな戦国大名」の中に小早川氏が載っている	小早川氏が大名となるのは毛利氏が豊臣氏に服属した後であり、「おもな戦国大名」とするのは不適切
P.90 本文	「このように、ヨーロッパ人がアジアをめざしてさかんに活動した時期を、大航海時代…」	「大航海時代」は南北アメリカ・アジア・オセアニアも入れた言葉である
P.96 本文	「農民は土地の所有権を認められた。」	「一地一作人の制」で耕地の「直接耕作者」と認められたが、「所有権」はない
P.101 本文	「江戸幕府の全国統治のよりどころは、徳川家が朝廷から得た征夷大将軍という称号にあった。幕府は、朝廷を敬いながらも」	幕府は、天皇朝廷を自己の権威付けのために利用したに過ぎず、政治からは切り離し京に閉じ込める体制をとった。「朝廷を敬い」というのは後の「紫衣事件」や勅使は將軍下座に座したことからも誤りである
P105 本文	「鎖国の最大のねらいは、外国による侵略の危険防止と国内秩序の安定のために、キリスト教を禁止することにあった。」	オランダが貿易を有利にするためにスペイン、ポルトガルの「侵略の危険」を喧伝したことはあったが、鎖国のねらいはキリスト教禁制→国民統制と貿易独占による幕府の支配権の強化とするのが一般的
P.122 上図 富嶽三十六景 解説	「遠近法を見事に使っている。」	北斎の富嶽三十六景の解説をすれば、遠近法を十分知りながらも「遠近法を外した誇張表現」にあるとするのが通常であろう

4年間訂正なし！

扶桑社は、教科書会社としての責務をまったく果たしていません。上記の「脳の容量2000CC」等は、誤りがわかった時点ですぐに訂正を使用校に送ってくるべき項目です。

「大東亜戦争」の名の下に描かれた民衆

他社版では「太平洋戦争」とか「アジア太平洋戦争」と記すところを、扶桑社版は「大東亜戦争(太平洋戦争)」としています。「大東亜戦争」という呼称は、この戦争は「自存自衛とアジアを欧米の植民地から解放する」ためのものだと、当時の日本政府が名付けたものです。日本の戦略拠点の確保と、東南アジアの石油・ゴムなどの資源の獲得という戦争遂行の実態をおおい隠すものです。

戦争と民衆の関わりについては、

「日本軍は乏しい武器・弾薬で苦しい戦いを強いられたが、日本の将兵は敢闘精神を発揮してよく戦った」

「…生活物資は窮乏をきわめた。しかし、このような困難の中、多くの国民はよく働き、よく戦った。それは戦争の勝利を願ってのことだった」

と記します。戦時下、戦争に協力しないと非国民とされ、戦争に反対することは命がけでした。国によって情報が統制され、言論の自由が奪われている中で、人々はお国のために、働き、戦い、殺し、殺された時代でした。そのような背景にふれず、人々の国への献身をたたえています。

他社版では、新聞、雑誌、ラジオなどを通じての情報統制や、戦争一色の学校教育を取り上げています。

◆ 描かれていない、戦争の実態

東京大空襲は「1945(昭和20)年3月10日には東京大空襲が行われ、一瞬のうちに10万人の市民が命を失った」と2行、広島・長崎の原爆投下は「8月6日、アメリカは世界最初の原子爆弾(原爆)を広島に投下した。(9日)、アメリカは長崎にも原爆を投下した」と3行で述べるだけです。日本がアジア各国に与えた被害＝日本の加害の具体的な記述はさらに乏しいのです。これでは、満州事変から敗戦まで、日本人約310万人、中国・東南アジア・太平洋地域では2000万人以上が命を失ったとされるアジア太平洋戦争の実態が中学生に伝わりません。日本書籍新社版や帝国書院版は、戦争の被害や加害の実態を6頁以上使って説明しています。

日本に都合よく史実を歪めてアジアを軽視

「中国は欧米列強の武力による脅威をじゅうぶん認識することができなかった。…朝鮮も同じだった。…日本は武家社会という面があり敏感に対応した」

扶桑社版では、明治維新をおこなった日本と対置させるように、ひたすら無知、無力なアジアとして描いています。中国でも朝鮮でも、外圧に抵抗する動き、近代化をめざす自発的な動きはさまざまにあったのに、一貫して無視されます。日清戦争では、

「新興の日本にもろくも敗れ…中国は、たちまちにして列強諸国の分割の対象になった」

と中国の弱さが強調されます。日本への多額の賠償金支払いが欧米の利権拡大のきっかけになったことにはふれません。

「東アジアの地図を見てみよう。…日本に向けて、大陸から一本の腕のように朝鮮半島が突き出ている。…朝鮮半島が…ロシアの支配下に入れば、日本を攻撃する格好の基地となり、島国の日本は、自国の防衛が困難になると考えられた。」

これは、日露戦争の背景を描いたものです。ロシアの脅威をことさらに強調し、朝鮮の存在が日本にとって危険だとでもいう記述です。戦後、日本が朝鮮を植民地にしたことについては、

「日本の安全と満州の権益を防衛するために、韓国の併合が必要であると考えた」

と日本政府の見解を記しています。日露戦争は日本とロシアが朝鮮半島と満州(中国東北部)の支配権を争った戦争です。戦争の原因を他国にだけ求めて日本のしたことを合理化することは、史実を歪めるもので、中学生に誤った認識を与えます。これではアジアの人々と仲良くできません。

◆ 進展する日中韓の交流

経済から文化・スポーツまで、日中韓の交流が進んでいます。杉並区もソウル市瑞草区と友好関係を結び、中学生が相互に訪問しています。また、歴史教科書や歴史教育について率直に意見を交わす、日中韓の教員や研究者の共同研究が始まっています。こうした交流の広がりは時代の流れです。

自国の視点だけから書かれる教科書はこの時代の流れにふさわしくありません。

ここにあげたのは江戸時代までに限ったものの一部で、近現代を含めてまだまだあります。

東京書籍版の記述	帝国書院版の記述
掲載無し	掲載無し
表示無し	1500cc
復元集落の写真	復元集落の図 柵と外の堀りがはっきりわかる
渡来人	渡来人
地図に北海道は描かれていない	左同
紫式部、清少納言の併記のみ	コラム「紫式部と清少納言」で併記してあるが両者の関係には触れていない
「執権の北条時宗がこれを退けたため」	「執権北条時宗がこれを拒むと」
戦国時代の地図に小早川氏は無い	左同
記述無し	「コロンブスの西インド諸島到達…バスコ・ダ・ガマのインド到達…アジア貿易にのりだしていきました。この時代を大航海時代と呼びます。」
「直接耕作する農民に土地の権利が与えられました。」	「田畑の広さや収穫高を調べ、耕地ごとに農民を登録しました」
「幕府は、禁中並公家諸法度…で天皇や公家の行動を制限し…朝廷を監視し、政治上の力を持たせないようにしました。」	「朝廷から征夷大將軍に任命された家康は」との表現のみ
「幕府による禁教、貿易統制、外交独占の体制を鎖国と呼んでいます。」	「禁教と貿易統制を徹底する方針」
解説はない	北斎の絵はない

なぜ、こんなに間違いがあるの？

代表執筆者の藤岡信勝氏は教育学者、西尾幹二氏はドイツ文学者で、歴史学の専門家ではありません。戦後の歴史研究の成果を受け止めず、自分たちの「物語」に都合のよい事実だけをひろい、都合の悪い事実は歪めたり無視しています。研究に基づかない教科書は困ります。

「つくる会」歴史教科書のここが問題!

—自由社版も扶桑社版も内容は変わりません—

神話と天皇の強調—戦前の教科書にソックリ

「(のちの神武天皇)は、…水軍を率いて…東に進んだ。…戦いが困難をきわめたちょうどそのとき、どこからか金色に輝く一羽のトビが飛んできて、尊の弓にとまった。トビは稲光のように光って、敵軍の目をくらませた。」 (扶桑社版)

「…すると、どこからとなく、金色のとび鴉が現れて、おごそかにお立ちになっている(神武)天皇の、お弓の先にとまりました。金色の光は電よりもするどくきらめいて、賊兵の目を射しました。」

(昭和18(1943)年「初等科国史上」)

これは、実在しない人物である神武天皇東征の神話で、左は扶桑社版、右は戦前の教科書の記述です。戦前の教科書では、『古事記』『日本書紀』の神話が子ども向けに脚色されています。扶桑社版はそれをもとにしていることが、よくわかります。こういう神話が扶桑社版には3頁も載せられ、また、聖徳太子を天皇中心の国づくりを進めた偉大な指導者と2頁にわたり記述します。さらに、大化の改新を「蘇我氏の横暴」と描くのも戦前と同じです。

「神話」と歴史の混同、天皇に関わる記述の異常な多さは、扶桑社版の特徴です。名前をいくら『新しい歴史教科書』と言ってみても、その古さは隠せません。歴史研究者は、「21世紀の若者の教材として提供しようとする人々の時代感覚を疑う」と強い疑問を述べています。

◆最終章のまとめには「昭和天皇」が登場

扶桑社版は、鎌倉から江戸の武家政権も天皇の権威が支えであったと書き、明治維新は、皇室の権威があったから政権の移動がスムーズに行われたと述べています。さらに最終章は、「誠実なお人がら」「立憲君主としての立場を貫かれた」「君主としての強い自覚」「国民とともに歩む」などと、戦争責任を棚上げにして昭和天皇を賛美するコラムで締めくくっています。日本の歴史を天皇の物語と描く教科書です。

民衆の生活や一揆の記述はバツサリ

幕末から明治はじめのできごとで、他社版には載っているのに扶桑社版には載せられていないことを書き出してみました。

- ・開国と民衆生活 ・世直し(一揆、打ちこわし) ・ええじゃないか
- ・五榜の掲示 ・徴兵制免除の規定 ・地租が重い負担だったこと
- ・徴兵の強制や学制に対する反対運動 ・自由民権思想の内容
- ・自由民権運動の広がりを示す地図など ・福島事件や秩父事件

扶桑社版には、普通の人々の生活・要求や、幕府・政府への訴え、支配者と民衆の対立などが描かれていません。後年、教科書に麻生内閣の政治が描かれるとき、内閣のやったことだけが記され、人々の不満や批判が載っていないとしたら、今の時代の姿がわかるでしょうか。

民衆、とりわけ女性の活躍が描かれていません。男性のエリート中心の描き方が目立ちます。

◆税は納めるものか、納めさせられるものか

律令国家の時代の税について扶桑社版は、「口分田の支給を受けた公民は、租・庸・調とよばれる税を納めた」と書いています。何ということはない記述のように見えますが、これを他社版と比べると大きく違うのです。

帝国書院版は「土地をあたえられた農民には、税や労役など多くの負担が課されました」と書き、「その負担はたいへん重いものでした」と、絵や地図、資料などを使って説明しています。日本書籍新社版も同様です。

扶桑社版には、租庸調の負担の重さ、人々の生活のようすなどの記述はいっさいありません。民衆(国民)は国に従う(協力する)のがあたり前で、国民と国との対立は本来起こることではないととらえているようです。それは古代から現代まで一貫しています。

*日本書籍(現日本書籍新社)版は2001年、帝国書院版は2005年まで、杉並区で使用されていた教科書です。